



田村市立都路中学校 学校だより 第20号

令和7年9月5日（金）

発行責任者：校長 佐藤 仁

TEL：0247-75-2009

めざす生徒像：自らの志を語り、目標に向かって主体的に努力できる生徒

めざす学校像：志を育む学校 学び合い、高め合う学校 信頼され、愛される学校

人権を考える

「人権尊重の重要性、必要性について理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けること」を目的の一つとして、福島地方法務局他主催の「第44回全国中学生人権作文コンテスト」福島県大会に3年生が応募します。次は、I・Rさんの作文です。情報化が進む社会で生活する私たちが老若男女関係なく、気をつけなければならない点や誹謗中傷をなくしより良い社会（学校生活）を送る上で心がけたいことを具体的に提案しています。Iさんの人権尊重、誹謗中傷のない安心して生活できる環境作りに、みんなで取り組んでいきたいと思います。

題名：誹謗中傷

「死ね」

この言葉を言われたらあなたは思うだろうか。

僕は、実際にこの言葉を言われている人をSNS上で見たことがある。何回もだ。泣いている人、笑っている人、無視している人、人によって言われた後の態度は違うが、全員が共通しているのは深く傷ついているということだ。誹謗中傷をされて傷つかない人などいないと思う。

なぜ、そのような言葉を言うってしまうのだろうか。その原因としてあげられるのが、「死ね」や「殺す」という言葉に重みが感じられなくなってきたからではないかと僕は思う。最近のアニメやマンガでは、「死ね」などの言葉を簡単に使っている。その影響で今の小学生、さらには未就学児までこのような言葉を使うようになってきている。特にゲーム内のボイスチャット機能で発言しているのが多く見られる。ゲーム内だけでなく学校での単なる話し合いでも言われている人は多いのではないと思う。このことが原因となり、自殺者数がまた段々と増えてしまっているのではないかな。僕は前、フリーアナウンサーとして活動している藤井貴彦アナウンサーが報道番組で、次のようなことを言っていたことを思い出した。「言葉で人は死にます。間違いでしたと後で謝っても命は戻りません。送信の取り消しをしたとしても既読の相手には必ず悲しみが残ります」その通りだと僕は共感した。

今の時代、顔を合わせなくても話ができる。だから怖い。SNSは、様々な人と話したり、ゲームをしたり、動画を見たりと、とても便利だ。しかし、相手の顔を見ることができないので、自分の考えていることを送ると相手が悪意の方へ勘違いしてしまう可能性もある。それが誹謗中傷につながってしまうことも十分ありえる。送った本人は、冗談のつもりでも受けとった相手には本気だと思われてしまうことがある。そのようなことを防ぐためにも伝え方を工夫することが大切だ。当然のことだが誹謗中傷は、人権侵害に該当する。悪口を言われた人は、すぐに立ち直ることができない。この世界から誹謗中傷をなくし、みんながお互いに支え合い、幸せに生きていくことができる世界になってほしいと願っている。

では、どうしたら人権侵害をなくすことができるのだろうか。まず、人権を侵害してしまう人の特徴として、人権に対する知識不足があげられる。それが原因だと僕は考える。このことから、人権を侵害しないためには、知識を深めることが重要だと思う。具体的には、人権とは何か、どのような行為が人権侵害にあたるのかを理解すること。差別や偏見が人権侵害につながることを認識する。そしてもう一つ、周りの人への配慮をすることである。相手の立場や状況を理解し、尊重する。違いを認め合い、互いに尊重する。困っている人がいれば、声をかけ、助け合う。このことができるようになれば、人権侵害をなくせるのではないだろうか。これはSNSを利用する時も同じだ。これらのことに加えて、SNSでは、誹謗中傷や差別的なことを書き込まない。プライバシーに関わる情報を書き込まない。匿名でも責任ある行動を心がける。不確かな情報を安易に拡散しない。これらを気をつけていくことで、変わってくるのだと僕は思っている。

最後に、このようなことをふまえて、自分の今までの言動を振り返ってほしい。振り返ることで、これから誹謗中傷にあう人が減っていくかもしれない。だから、一度見直してみて、自分自身を変えてほしい。もし、自分が誹謗中傷などをされた時は、周りの人を信頼して相談することも大切だ。それが、自分を追い込まないことにつながる。

「自分がしたことは、いずれ自分に返ってくる」この言葉を忘れないでほしい。自分が相手に「死ね」と言えば、相手も「死ね」と言うようになる。自分がいじめをすれば、自分もいじめられる。人間はこのような循環をしている。ただそれは、良いことをした時も同様だ。困っている人を助けたら、周りから称賛される。このようなことを考えて生活してほしい。

この文、すべてを読んだあなたへ。

「それでも日常生活で、死ねと言いますか」